

土岐市立小中学校適正規模等検討委員会（第１回）会議録

日程

令和８年６月２９日（月）

場所

土岐市役所 大会議室２Ａ

次第

- １．開会のことば
- ２．委員の委嘱
- ３．教育長あいさつ
- ４．委員長、副委員長の選出
- ５．議　　事
 - （１）土岐市立小中学校の児童生徒数・学級数の将来推計について
 - （２）学校施設について
 - （３）公立小・中学校の適正規模・適正配置について
 - （４）各委員からの意見聴収
 - （５）その他
- ６．閉会のことば

出席者

策定委員

福地　淳宏	学識経験者（岐阜聖徳学園大学教職教育センター ・教育学部教授）
山田　利彦	学識経験者
可知井　実	自治会代表
加藤　紀久朗	公民館長代表
大竹　政信	社会教育委員代表
黒田　正直	学校運営協議会西陵校区代表
藤村　伊津子	学校運営協議会泉校区代表
藤本　志保	P T A連合会代表
日置　悠希	幼稚園・こども園保護者会代表
小栗　祥吾	小中学校校長会長
前田　宏香	幼稚園・こども園園長会長

事務局

長谷川 広和	土岐市教育長
板倉 義樹	土岐市教育次長兼学校教育課長兼教育研究所長 兼教育支援センター所長
西部 浩司	教育委員会事務局長兼教育総務課長
神戸 詔悟	地域振興部次長兼生涯学習課長
中垣 博之	政策推進課長
山岡 哲	行政経営課長
辻野 まどか	幼稚園・こども園課長
鈴木 寿美	教育総務課課長補佐
内海 裕樹	学校教育課課長補佐
羽柴 心彩	教育総務課主査

午後 1 時 2 2 分 開会

〔事務局〕

本委員会の委員、事務局の紹介、委員へ委嘱状の交付。

〔教育長挨拶〕

今年度より第 3 次教育振興基本計画「夢・絆プラン」がスタートした。この計画のもと、「夢と絆」をキーワードに土岐市ならではの教育を推進しながら未来を担う人づくりに取り組んでいる。しかしながら、少子化が思った以上に進んでいる。計画の中にある通り、学びを支える教育環境の整備・充実として、少子化、子どもの多様化、社会の複雑化など様々な課題に対応できるこれからの学校の在り方について検討いただきたい。一番は「土岐市の子どもたちの未来をどうすべきか」を、①少子化を踏まえた子どもの学び、②義務教育 9 カ年を見通した小中学校の枠組み、③望ましい小中学校の規模や配置、の 3 点についてご熟議いただきたい。

〔事務局〕

委員長、副委員長の選出。

〔委員長挨拶〕

学校の適正規模化についてはどの市町も抱えている大きな課題である。地域住民の思いや行政の方向など非常に複雑な関係の中で進んでいくため難し

い。しかし子どもたちの未来を考えると避けては通れない問題のため、議論を深めていきたい。

〔副委員長挨拶〕

副委員長として委員長を補佐し、本委員会が円滑に進行するよう任務を務めたい。

〔事務局〕

この後の議事進行について委員長にお願いする。

〔委員長〕

議事1「土岐市立小中学校の児童生徒数・学級数の将来推計について」、議事2「学校施設」について事務局の説明を求める。

〔事務局〕

説明

〔委員〕

土岐市は校区ごとに1小1中が多いようだが、それぞれの校区で見ると、一番児童生徒数の減少が激しいのはどこの校区か。

〔事務局〕

駄知校区であると考え。小学校は令和9年度から、中学校は令和12年度から1学年1クラスの単学級となる見込み。

〔委員長〕

議事3「公立小・中学校の適正規模・適正配置について」事務局の説明を求める。

〔事務局〕

説明

〔委員〕

「令和の日本型学校教育」を推進する学校適正規模・適正配置の在り方に関する調査研究協力者会議の議論のまとめ（国通知）に、児童生徒の教育条件の改善の観点とあるが、具体的にどのようなことが想定されているか。

〔事務局〕

少子化が進んだ先の子どもたちへの教育をどうしていくか、建物の老朽化や予算不足など様々な問題はあるが、何よりも子どもたちへの教育をどうするかということを優先するという意味での観点と捉えている。

〔委員〕

1 学級 35 名ということについて何か指針はあるか。

〔事務局〕

法律により令和 8 年度から中学校も 1 学級 40 名から 35 名に引き下げられたが、岐阜県では令和 3 年度より独自に中学校も 1 学級 35 名としているため、今後もそのようにしていく。

〔委員〕

1 学級 35 名いっぱいとなった場合、市として何か支援等はしているか。

〔事務局〕

通常学級で人数が多い場合は可能な限り支援員を増やしている。また特別支援学級では、特に自情学級で人数が多い場合は、特別支援サポートティーチャーを配置している。

〔委員〕

濃南小中学校の小規模特認校制度についてご説明願いたい。また小中一貫教育学校と義務教育学校と様々な種類があると見受けられるが、整理されていれば共有してほしい。

〔事務局〕

小規模特認校制度は、土岐市内の濃南小中学校区外に住所がある子どもが希望し条件を満たせば濃南小中学校に通学することができる制度。

〔委員〕

小規模特認校制度を実施した背景としては、地域の子どもの減少により、他地区からの入校を増やすことが目的としてあるのか。

〔事務局〕

濃南地区は複式学級が発生するほど児童生徒数が減少していたためそれに

対する対応という面と、濃南独自の魅力的な教育活動を受けたいと希望する子どもを呼び込みながら濃南の教育を高めていきたいという願いもある。

一貫教育と義務教育の正式な切り分けは難しいが、濃南小中学校については小学校中学校でそれぞれの教育課程に取り組んでいる。義務教育学校は自治体の判断により9カ年のうち前期を5年、後期を4年とするなど独自の教育課程に取り組める。

〔委員〕

濃南小中学校を一貫校にする話が上がってから実現まで何年ほどかかったのか。

〔事務局〕

5年程度かと思われる。

〔委員〕

通常そのくらいかかるということか。

〔事務局〕

地域の理解を得ながらいろいろ準備しなければならないため、これ以上かかる場合もある。

〔委員〕

駄知と肥田を統合する可能性があるという耳にしたが、小学校同士を統合するのと同地区の小中学校を統合するのでは、案としてどちらがより具体的か。

〔事務局〕

統合すべきか、統合するならどちらの案がいいかも含め、この委員会で多様なご意見をいただきたい。

〔委員長〕

議事4「各委員からの意見聴収」各委員からの忌憚のないご意見を賜りたい。

〔委員〕

資料を読み、子どもが減っている現状を突き付けられた。その中で子どもたちの未来をどうしていけばいいか考えるということだが、地域の思いもあ

るし、子どもたちの思いもある。統合し人数が増えれば、その分多様な考え方や捉え方に触れられる一方、少人数では個人をより見てもらえる、意見を言えるなどの少人数なりの良さもある。今後これがいいとひとつに結論付けるのではなく、様々な意見をすり合わせてよりよい形にまとめていく必要がある。それぞれの地域性にあった形になるようにしたい。

〔委員〕

土岐市の現状を初めてしっかり理解できた。子どもが減るにつれ教員の数も減り、行事も大規模校に比べると縮小していくことも仕方がないと思っていた。統合することで教育の幅が広がるかもしれないと考えると保護者としても嬉しい。しかし保護者としては通学や分団についてどうなるのか気になる。保護者間の連絡も現時点であまりとれていないのに、統合した場合に他地域の保護者と連携できるのか不安。

〔委員〕

土岐市では地域ごとの連携が取れていないと感じるが、統合には地域同士の協力が必須なので、子どもたちの未来を第一に考え土岐市としてどうするかを検討したい。

〔委員〕

昔は駄知、泉、土岐津の順で児童生徒数が多かった。地元の窯業関係に従事している家庭も多くその子どもが通っていたが、現在は地元産業も衰退しているので児童生徒数の減少にもつながっている。泉が丘や土岐ヶ丘ができて増えた児童生徒もいずれは減少することを考えると、先を見据えた議論をしなければと思う。

〔委員〕

統合は賛成。土岐市の将来を担う子どものためにということを考えると、ただ人数で捉えるのではなく、こういった形で統合するのが一番いいのかを考えなくてはならない。

〔委員〕

各小中学校の運営協議会を通して、地域の意見を集めた。土岐津校区では、すぐに児童生徒数が大きく減ることはないから大丈夫だろうという認識であった。しかし資料を見ると危機感を持たなければと思った。他地区は統合の可能性はあるのか、駄知や肥田の一部がゆくゆくは土岐津になるのではない

か。土岐津では2つの保育園と1つの幼稚園があるので統合を考えなくてはいけないのではという意見があった。濃南地区では複式学級が発生することへの心配の声が上がった。駄知校区では、小学校と中学校が統合する可能性が高いだろうという予想と、濃南へ特認校制度を利用し通学している児童生徒もいるので、児童生徒数が少ない地区同士で取り合いになってしまっているのではないかとする意見。若い世代からは、肥田との統合も仕方ないという意見もあった。肥田地区は小中学校が近いため、先生の行き来もしやすい小中学校の統合がいいのではないかとのこと。上肥田と肥田浅野など地域ごとの考え方も違うため、学校区の見直しもありなのではという意見があった。

〔委員〕

地域と学校とのつながりがあるようでない。各地区の小中学校同士の連携も取れていない現状なのに、他地区との連携は非常に難しいと思う。PTAでも立候補して役員になる人は少なく、くじや他薦でなってしまったという人が大半。しかも自分が関わる数年だけを考えた意見が出てくることが多く、その意見が決定になってしまう。この委員会では5年先10年先の将来を見据えた、子どもたちの未来を真剣に考えて議論したい。

〔委員〕

どれだけ時代が変わろうが、地域が協力できる区分の最小単位は昔のむら単位なのだと思う。いくら土岐市だから、同じ地域だからといっても無条件に連携できるとは限らない。地域性を理解して整合性を取っていかないと、まとめることは難しい。校舎やプールの老朽化もあるため、様々な立場で意見を出し合って議論したい。

〔委員〕

全国的に見ると、小学校の暴言暴力、授業中の離席、教室脱出などの問題が散見されている。学力不振や発達障害、不登校の割合も高い。子どもの数だけでは測れない問題がたくさんある。教員の数少なすぎることも課題であるが、数だけではなく質を見ていくことも大事だと思う。質を高めることを考えると、1学級35名という定数も見直しが必要なのではないか。

〔委員〕

統合はやむを得ないと思う。他地区の小中学校同士、中学校同士の横の統合よりも同じ地区の小中学校の縦の統合をした方が、メリットがあると思う。時間数の少ない図工、美術、音楽などの教科担当が小学校にも専門的な授業

を展開することができる。小中学校で常日頃一緒に生活することで中1ギャップがなくなる。通学バスの必要がない。他市からの転入先の偏りを防げる。各地区に小中学校がないと、小中学校がある地区ばかりに転入先が偏ってしまう。異年齢の交流ができる。地域ボランティアを自分が住んでいる地区に派遣できる。運動会や修学旅行を一緒にすることによって上級生の自覚や下級生から憧れなどが生まれる。このようなメリットが最大限発揮されるような統合を進めていかななくてはならない。中学校の制服もなくせばもっと縦の統合が進むのでは。

〔委員〕

今日は現実が非常に厳しい、今後土岐市としてこのままではいけないという共通認識を持てたことが大きい。現状や文科省が示す理屈は理解できるが、これまでの各地域の歴史も十分に理解し耳を傾けていかないと破綻してしまうし子どもも幸せにならないのではと思う。5年後10年後にどういう社会になっていくのかを予想しながら、保護者の気持ちに寄り添い、教育の在り方や施設、教育課程、子どもたちの課題がどう解決できるかというビジョンも含め検討する必要がある。

どこかの段階では、当事者である未来を担う子どもたちがどう思っているのかを知るため、中学生の参画にもつなげていけるとよい。

また、県内外問わず他市には様々な事例があると思う。視察などをしてメリットデメリットを肌で感じることも大事。

長期にわたる検討になるので、いろんな意見が飛び交うことが予想されるため、慎重にどういう組織で何を検討するか、どんなプロセスで進めたいか、多様な意見を聞きながらそれが民意になるように考えたい。

〔委員〕

資料の児童生徒数の推移は、コロナ前後で計算方法に違いはあるか。

〔事務局〕

コロナより前からの推移に基づいて算出しているため、コロナ前後で分けているわけではない。

〔委員長〕

議事5「その他」事務局の説明を求める。

〔事務局〕

委員会のスケジュール、会議録、資料について説明。

〔教育長挨拶〕

委員の皆様より様々な意見をいただき感謝する。ご指摘があったように行政側は数を見てしまいがちだが、数ではなく歴史や質を見ることが大事であること、学校の存在意義を子どもたちの未来にどうつなげていくか考えていきたい。今後とも貴重なご意見を賜りたい。

午後 3 時 2 5 分 終了